愛鳥教育

1981 3月

第3号

愛鳥教育研究会

二年目にむかって

愛鳥教育研究会会長
田村活三

わが愛鳥教育研究会は昨年５月17日皆様の絶大なる御尽力・御協力により発足いたし二年目に踏みだしました。生れ出づるなやみ―― いな産みの苦しみと申しますか，その研究をどう進めるか、会員募集や研究校をどう広めるか、会の運営についても私達は手さぐりでやってまいりました。

さて今回は当初の事業計画にも予定しておりました本年度発足初一年の締めくゝりとし、かつ年報的にもと考え会員の皆様に日常活動の記録をお願いいたしました。これによって愛鳥教育を始める方々の心強い資料になればとも考えます。そして手から手に、核を拡げていただきたい。

昨年発足のあと第二回研究会として８月に自然教育園において、自然観察の方法についての講演と園内見学、愛鳥モデル校の歩み実践例として愛知県形原北小学校の発表を伺いました。いずれも熱心に積み重ねられた発表で非常に有益でした。

11月の鳥獣保護実績発表大会、これは本号に詳しく報告をねがい以って吾々の平素の教育実践の資としなければなりません。それから東京都二子玉川小学校の研究発表会においてはどんな環境でも熱意とやる気があれば都会でもこのように立派に出来ると言う事を示してくれたと、聞きました。野鳥保護教育は都会でもこのように立派にできます。都会でも研究の仲間をどんどん殖やしていきたいものです。

私は冒頭「手さぐり」でと申しましたが、８月の研究会の後の理事会で、各種印刷物・時折りの通知。この研究誌等配布する方法一つについてもこれを全国の学校に配ることの隘路を痛切に感じました。ほんの一部のルートからしか配れません。会費についても同様徴収するのが困難です。郵送料も値上げもあって又然りです。何としても一人でも多く、一校でも参加を殖やしたいものです。皆様本年もそれぞれの分野で頑張って下さい。

愛鳥教育　３号　目次

二年目にむかって……田村活三…(1)
台場小鳥の村 ……(2)
北海道旭川市立台場小学校　渡辺光子
土よう日早起き探鳥会……(3)
根室自然保護教育研究会　三浦二郎
ふるさと探鳥会……(4)
宮城県志津川愛鳥会　田中完一
養護学級にて……(4)
宮城県立山元養護学校　佐藤寛次
愛鳥活動の歩み……(5)
山形県村山市立大高根中学校
野鳥と仲よく……(6)
栃木県茂木町立千本小学校　片岡一郎
野鳥のいる山と川……(8)
愛知県岡崎市立河合中学校　古田忠久
体験教育を通して……(9)
近江八幡市立島小学校　北川恒雄
学区の野鳥と自然……(10)
滋賀県マキノ町立マキノ南小学校
愛鳥活動の第一歩……(12)
大分県杵築市立豊洋小学校　郷司信義
地域の特性を生かした豊かな人間性の育成……(13)
世田谷区立二子玉川小学校　江袋島吉
鳥獣保護実績発表大会に参加して…下田澄子…(16)
巣箱づくりの注意　(2)……柳沢紀夫…(17)
編集後記・入会申込書……(20)

☆　☆　☆　☆

●第15回鳥獣保護実績発表大会記録

愛知県　豊橋市立豊岡中学校……　1
滋賀県　甲南町立第三小学校……　4
千葉県　千葉市立土気中学校……　6
福島県　矢祭町立内川小学校……　8
熊本県　高森町立野尻小学校……　10
広島県　東城町立帝釈小学校……　12
沖縄県　県立美里高等学校野鳥クラブ……　14
北海道　白老町立飛生小学校……　16
富山県　砺波市立栴檀野小学校……　19
茨城県　潮来町立潮来第一中学校……　21

「台場小鳥の村」

旭川市立台場小学校
渡辺光子

台場小鳥の村の歴史は、昭和34年5月11日に始まり、地域の住民82戸と、地域内にある小学校をはじめとした諸団体を中心として開村された。この開村は、北海道としては札幌市藤の沢小学校についで2番目の開村である。

台場小鳥の村は、旭川市の西域に位置し、旭川駅から7㎞、神居町高砂台の台場峠から景勝地神居古潭入口まで、旭川・札幌間国道12号線沿いの小盆地で、平担地、丘陵地、小沢の多い山地、石狩川、伊納川などのある複雑な地形で、野鳥の生息に好適な地といわれているいわゆる台場ケ原一帯を占め、面積はおよそ396㏊に及んでいる。

村は、村長、助役、収入役、書記、議長、副議長、議員、監事等の役員をおき、

1. 有益鳥の愛護
2. 森林の愛護
3. 教育活動への活用
4. 青少年の健全育成
5. 市民憩いの場づくり
6. 自然の保護

の6項目をスローガンとし、村民（地域住民）が一体となって野鳥愛護活動を行い、野鳥と人の楽園を築こうと努力して来た。

昨年5月、開村20周年の記念行事を行ったが、これまでの主な活動のあしあとを見ると

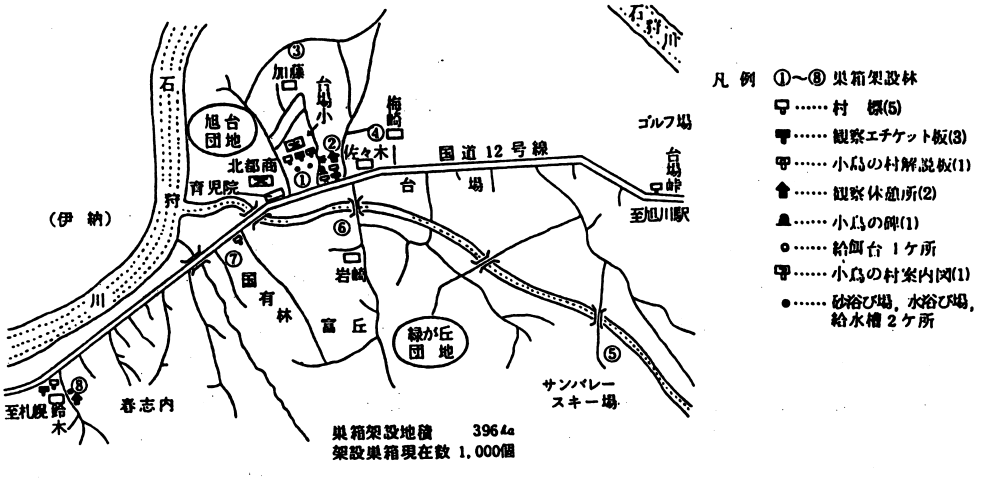
1. ムクドリ、コムクドリ用の巣箱架設
   （架設累計2,505個、現在約1,000個）
2. 観察休憩所の建設
3. 小鳥の碑建立
4. 小鳥水のみ場設置
5. 給餌台設置
6. 各種表示板設置
7. 野鳥観察道路の開通（営林署の協力を得て）

など、どれも村民の苦労のあとがしのばれる。この間、日本鳥類保護連盟から表彰され、日本野鳥の会々長中西悟堂氏じきじきの来訪をいただき激励の額書を受け、文部大臣奨励賞、農林大臣賞を受けるなど8件もの褒賞をいただき、地味で困難な野鳥愛護活動を続ける励みとなり、また誇りとなっている。

現在までの観察によると、ヤマゲラ、オオアカゲラ、クマゲラ、マヒワ、アオジ等たくさんの野鳥の姿が認められている。

しかし、開村当時の台場小学校児童数81名から現在の212名の数字が示すように、地域の住宅化が進み、野鳥の生活圏がおびやかされている事は事実である。したがって今後は、現在までの活動の他に各戸毎誘鳥木を育成し給餌に備える等、新しい方向での愛鳥活動の必要性を感じている。

旭川市台場小鳥の村



「土よう日早起き探鳥会」

北海道中標津町計根別中学校
三浦二郎

計根別中は北海道東部、根室地方の内陸部の酪農地帯にあります。広々とした原野はすべて青々とした牧草畑で、それも単一植生になっていて、生息野鳥もヒバリだけです。が周囲には防風林があり、その林縁部にはブッシュが残り、それに河川は殆ど原始河川のままで曲りくねっていて、河畔林としての自然林が温存されており、それらは野鳥の生息環境として豊かな相を保っています。

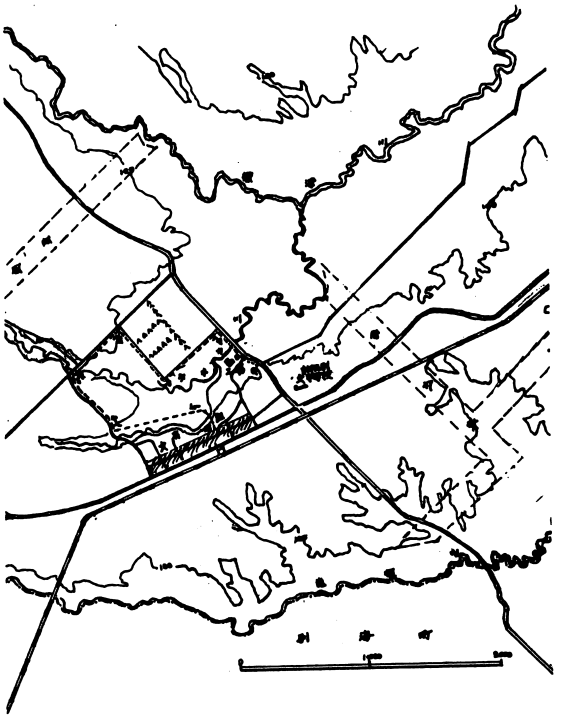
私は、自分なりに早朝のロードセンサスを続けていますが、この学校に赴任して1年目は6～7月にかけて、きめたコースを毎日歩き、どこにどんな鳥がすみついているかを調べ上げました。

さて55年度は2年目ですので、このコースを生徒達と一緒に歩いてみたいと考え、「土よう日早おき探鳥会」をよびかけました。まず探鳥は早朝実施でなければ意味がありません。次に土よう日と限定したのは、生徒達に毎日の参加を求めることはどうしても無理がかかります。というのは、北海道では屋外スポーツのシーズンが限定され、ちょうど野鳥観察の適期である5～7月がスポーツクラブの活動期で、帰宅してから学習机に向うのですから朝起きは相当に辛いらしいのです。しかしせめて週に一度、さわやかな朝の空気の中を歩き、朗らかな野鳥の声に耳を傾け、また次々に咲く野の花に目を向けることはきわめて有意義でないかと思うのです。

第1回を連休明けの第二土曜としました。この日は、前日午後から雨になりましたが朝には止みスタート時刻ときめていた6時には10名位の参加がありました。この時期にはまだ夏鳥の顔はそろっていません。一番乗りで渡来していたハクセキレイが広場におりていて尾を振りながら何やらついばんでいました。崖の坂道を下りて木橋の上からのぞく川の流れにはバイカモが鮮やかな緑をゆらめかせていました。小川を渡った所でコゲラがギーッと鳴き、続いてビンズイが梢の先から舞い上って早口のさえずりを聞かせてくれました。林の立木を叩くアカゲラのドラミングと、オオジシギの急降下の尾羽の雷音が朝の空気をふるわせます。この日は風のせいかあまり多くの小鳥の声は聞かれませんでしたが、柳の細枝にとりついて何やら夢中になってついばんでいるヒガラの姿をゆっくり時間をかけて観察して、予定通り7時に雪印工場の前で解散しました。生徒達もそれから帰宅し朝食をとって登校するのに充分なゆとりのある時間なのです。

その後の土曜日もずっと天候に恵まれ、7月初旬（学期末テストの前）まで欠かさず続けることができました。1週間に1回の探鳥会ですが、毎回新しい生徒の顔ぶれと、夏鳥が加わり楽しく続けることができました。参加した生徒にはあらかじめ出現しそうな鳥種をプリントしたチェックリストをそのつど渡して、それに記入させます。記入度は特に点検したりせず生徒個々の観察力の向上にまかせました。自由な参加意欲を点検等でそぎたくないからです。

愛鳥教育は、カリキュラム化することもあってもよいと思いますが、こういう課外的な活動のやり方もあってよいのでないかと、つたない実践の一端を述べた次第です。



「ふるさと探鳥会」

宮城県志津川愛鳥会
田中完一

昭和55年12月7日志津川愛鳥会は日本野鳥の会事務局長市田則孝氏や日本野鳥の会宮城県支部代表、町教育長等の来賓を迎え第27回の「反省会」を開催して一年間の諸行事が発表され各種の賞状賞品が授与された。

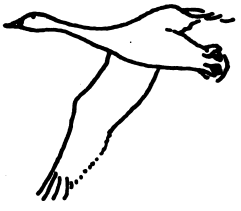
(1) 会合を持った回数52回
- (A) 大探鳥会3回、伊豆沼・蒲生・室根山
- (B) 中探鳥会2回、小泉川河口海岸
- (C) 小探鳥会3回、町近在コース
- (D) はんごうすいさん2回（海岸の清掃をかねて）
- (E) 「バード・ウィーク」と「鳥霊祭」の集い（恒例）
- (F) 反省会1回（恒例）
- (G) 元朝まわり（恒例）
- (H) 例会39回（日曜日の夜5～7時まで）

(2) 会員数40人の学年別分類
- (A) 中学生以上9人、(B) 小学生6年生5人、
- (C) 小学生5年生9人、(D) 小学生4年生5人
- (E) 小学生3年生以下12人

(3) 「まじめ賞」

52回全出席	1人
51回出席	3人
49回出席	1人
48回出席	4人
46回出席	1人
45回出席	3人
43回出席	1人
42回出席	1人
41回出席	2人
40回出席	2人
39回出席	2人
以上	20人

「珍鳥発見賞」	1人
「友情賞」	1人
「野鳥保護賞」	8人



「養護学級にて」

宮城県立山元養護学校
佐藤寛次

山元養護学校は、宮城県の太平洋岸仙台湾に面した亘理郡山元町にあり、国立療養所宮城病院に入院している病虚弱児を対象としている養護学校である。

現在私は重症児の教育をしているので愛鳥教育をする機会は少ないが、学習発表の時に

イ．諸展示　図鑑、パンフレット、ポスター他

ロ．愛鳥よびかけのプリント配布

を行なっています。

来賓、父兄、病院の職員などを対象にしており児童、生徒の友人・兄弟等にも効果をあげている。特にぜん息児は宮城県内だけでなく福島・茨城・埼玉県からも入院している。

効果の一例として

病院の中庭のイチョウの木にキジバトの巣をつくったのを、主治医はじめ保護をし、枝を切るのを一年延期した。写真をとったり、スケッチした例。

先生や児童・生徒からこんな鳥を見たとか、声を聞いたとか、巣を見た等報告が多い。

また、昭和50年独立、落成の学校なので、環境整備として緑化しているが、餌木であるウメモドキ、ネズミモチ、南天、ピラカンサス、ミヤギノハギ等を植樹した。

そして、病院そのものは、非常に自然を残した環境であるが、30周年記念公園づくりの時にも、餌木を植えた。

問題点

イ．ぜん息児は入退院が多いので、それに対して効果的な愛鳥教育をしたい。

ロ．野鳥教育のカリキュラムをきちんとつくりたいものである。（自然教育、勤労、生活体験学習の指導内容）

ハ．もっと、環境整備をして、野鳥のためのすばらしい環境づくりに努力したい。（今でも裏山で、ウグイス、カッコウの声が聞え、校庭でキジの親子、セグロセキレイの親子が見られる学校です。）

「愛鳥活動の歩み」

山形県村山市立大高根中学校

1. 本校の位置と概況

本校は奥羽本線楯岡駅から北西へ約12㎞、西に出羽丘陵に属する標高1,462ｍの葉山、東にこしき岳、北西には大高根山と、周囲を山々に囲まれた純農村地帯にあり、学区の東端を山形県の母なる川、最上川が流れている。

2. 活動の歩み

昭和37年　東北北海道緑化推進協議会
　造林コンクール　第二位
昭和39年　愛鳥モデル校指定
昭和41年　日本鳥類保護連盟より表彰
　（野生鳥類保護について）
昭和45年　全国緑化コンクール植林の部入選
昭和50年　野鳥愛護校指定（大日本猟友会）
昭和53年　愛鳥モデル校指定（53年度～56年度）
　野鳥愛護作文コンクール　県知事賞
昭和54年　○野鳥愛護作文コンクール
　奨励賞　○実のなる木の植樹（日本鳥類保護連盟より寄贈）（ナナカマド、ムラサキシキブなど五種、合計90本）
　○環境庁において鳥獣保護実績発表、林野庁長官賞

3. 今年の活動

(1) 愛鳥週間ポスターコンクール　五月
　全生徒の作品から優秀作品をえらび県に応募した。

(2) 野鳥愛護作文コンクール応募　五月
　○県知事賞
　○全国少年少女「愛鳥」作文コンクール第二席入選

(3) 巣箱つくりと取りつけ　五月
　○全生徒参加の校内巣箱コンクール
　○巣箱とりつけ
　学校の南約３㎞のところにある枯木山の学校林（約13.3ha）に全生徒が各自とりつけに行く。本校の伝統ある行事のひとつである。
　学校林に特に多い鳥類は約30種類であるがその中でカラ類が特に巣箱を利用しているようである。ここは、山あり野原あり、谷川ありで、地形が多様であり水が豊富である。また、果実をつける植物が多く餌に恵まれているし、針葉樹と広葉樹が混植されているので生活と逃避の両方の場所が確保されている。更に、鳥獣保護区に指定されているので、野鳥がすむには絶好の場所である。

(4) 探鳥会　八月
　毎年、三年生が葉山山麓で二泊三日のキャンプをするが、その中に探鳥会が計画される。今年は雨に降られて実施できなかった。

(5) 愛鳥モデル校通信の発行
　随時発行し全生徒に配布している。
　１号　愛鳥週間のねらい、巣箱の作り方
　２号　愛鳥週間関係
　３号　巣箱コンクール入賞者発表等
　４号　愛鳥映写会等
　５号　少年少女「愛鳥」作文コンクール
　６号　愛鳥講演会、田沢沼の白鳥等
　７号　田沢沼の白鳥、愛鳥度調査等
　８号　田沢沼の白鳥、環境庁野鳥調査等
　９号　野鳥救護等

(6) 愛鳥講座　九月
　映写会「自然のつりあいと保護」
　　「千鳥と子どもたち」
　講演会「大高根の野鳥について」

(7) 愛鳥コーナーの設置　十月
　愛鳥モデル校通信、野鳥についての調査や写真などの展示

4. これからの取組み方

巣箱つくり、巣箱コンクール、巣箱かけ、探鳥会、愛鳥モデル校通信の発行、野鳥愛護作文コンクールや愛鳥ポスターコンクールへの応募、愛鳥映写会、講演会など毎年行なっていることはさらに充実させながら続けていくと同時に、次のようなことも積極的に行なっていきたいと考えている。

○この地区にすむ鳥の種類や生態の調査
○この地区にすむ鳥の写真展
○鳥をテーマにした創作コンクールや俳句大会
○詳しい営巣の実態調査

「野鳥と仲よく」

栃木県茂木町立千本小学校児童会
片岡一郎

私たちの学校は栃木県の南東部にあり、那珂川まで約４キロです。新校舎ができてから４年目、その年から緑化にも力を入れています。昭和51年度より健康優良学校、学校安全優良校、よい歯のコンクールなどに連続入賞しています。

さて、校舎裏や校庭のまわりには赤松やくぬぎ林や池などがあり、小鳥の生活には都合のよい場所となっています。白い校舎のあちこちには、スズメの巣が見られ、時々ヒナが落ちて大さわぎとなり、もとの巣へもどしてやったりしています。

千本小の子どもは、いつも明るく、素直だと言われています。本校の教育目標に「明るく生き生きした子ども」があげられています。私たちは、友だちの間だけでなく、何も言えない私たちのために心を明るくし、はげましてくれる小鳥やこん虫、植物を愛し育てていき、思いやりのある明るく生き生きした子どもになれるよう学校ぐるみで鳥類保護に取り組んでおります。

思えば、昭和50年３月、卒業生が１人１箱の巣箱を卒業記念に作り、学校のまわりに取り付けました。52年３月には、巣箱の他に学年１台の餌台を作ってくれました。その作業が今でも続いております。

54年２月には、児童会が中心となり、地区ごとに飛んで来る野鳥を父兄に書いてもらいそれをまとめて、千本小を中心とした野鳥の分布図を作りました。

校内巣箱コンクール等も毎年開いておりますが、はじめたのは53年の６月からです。

実のなる木も、児童会が中心となって家庭より持ちよって植えました。バラ、ナンテン、ムラサキシキブ、ガマズミ、ウメモドキ、グミの木などが集められました。

更に、５月には毎年、校内愛鳥ポスター展を開き、入賞作品を県へ出品し、11月には野鳥に関する標語の募集、12月の学芸祭には１年間のまとめを発表しております。

また、５月には学校内に立札（「野鳥は森のガードマン」）を作り、目立つところにたてております。

54年度には鳥の名、鳴き声、えさ、活動のようすも調べてみようと言うことになり、父兄の協力でまとめてみました。わからない点は図鑑や辞典で調べました。

ＰＴＡ新聞にも毎年、広報活動の一つとして出してもらっています。今年も夏休み前に全校生に呼びかけて、小鳥の喜ぶいろいろな「タネ」を集めたところ、たくさん集まりました。それらは冬餌台にまいてやります。

餌台の利用では、各学年ごとに分担して、毎日給食の残りのパン、こく類、種などを昼休みまでに乗せておきます。また、それを双眼鏡で観察したりしています。

次に、千本小では54年度より「校内鳴き声当てコンクール」をしております。これは昼食の時に鳴き声レコードを教室に

流し、プリントした用紙を配って鳥の名を書いてもらう方法です。低学年にはすごく人気があります。

年間計画表も作り、私たちが実行できる内容を計画し54年度よりこれで活動しています。

千本小の活動状況は「町報もてぎ」や「朝日小学生新聞」県の「下野新聞」にも54年から55年度にかけて出してもらいました。

きっと、今では千本小の愛鳥活動は、まわりの人々の関心を集めていると思います。

昭和54年11月30日、東京の環境庁での全国発表大会に県代表となって出場し、連盟会長賞をいただきました。55年度には栃木県で1校だけの大日本猟友会よりの野鳥愛護校として指定されました。

そこで本年度は、餌台の改良充実と巣箱の補充、家庭への呼びかけ（「保護活動」）、えさ集めなど年間計画に従って活動をすすめております。

さて、今年度もあと2か月となりましたが、今児童会で反省されていることは、

1. 高学年中心の活動となりがち。
2. 学校付近の野鳥について、もう少し根気よく細かく記録できないか。いつ頃どんな鳥が来るかなどを。
3. 野鳥の名まえ、鳴き声を全校生に早く覚えてもらう。
4. 他の（近くの）学校にもこの活動を広めて、情報交換したい。
5. 1種類の鳥について、「活動のようす、食べ物、巣、ひな」など続けて観察したい。

などが課題となっているわけです。今後も、私たちは、これらの活動を生かし、学校や家のまわりを小鳥の楽園とし、いろいろな種類の鳥が1年中飛んで来ていっしょにおやつを食べ、話しかけ毎日を仲よく楽しく過ごせる日を千本小学校生92名が願って更に、卒業生から下級生へと愛鳥活動をいつまでも続けるよう計画し実行しております。

「野鳥のいる山と川」

愛知県岡崎市立河合中学校
古田忠久

理科部野鳥班の活動は主として生息調査及び生態研究を中心に、こゝ数年来進めてきました。こうした活動が、生徒会でとりあげられ、保護活動の一面については、全校体制で取り組んでいます。冬期の給餌活動は一年、巣箱の製作は二年、給餌台巣箱の架設は三年がそれぞれ学級で協議し責任を持って実践しています。

野鳥班は、月二回の生息分布調査、オシドリ、カモ類の生息調査、カワセミ、カワガラスの生態研究などが主な活動、昭和51年より始めた「環境構造と野鳥生息の関係」調査が本年度で完了しますので、その一部の結果を報告いたします。

本学区は、岡崎市の南東部にあり、自然環境に恵まれ、環境破かいは全くない状態である。ただ山間部でも、燃料がマキ、木炭からガス、石油等に変わったため、広葉樹林がスギ、ヒノキ、マツの林に変わりつゝある。そのため野鳥にとって都合のわるい条件が生じはじめた。そこで、どのような林相構造が生息に適しているのかを調査し、「野鳥だより」にのせ学区に配布、私有林の管理面でできるだけの協力をお願いしている。

1. 河岸環境の分布

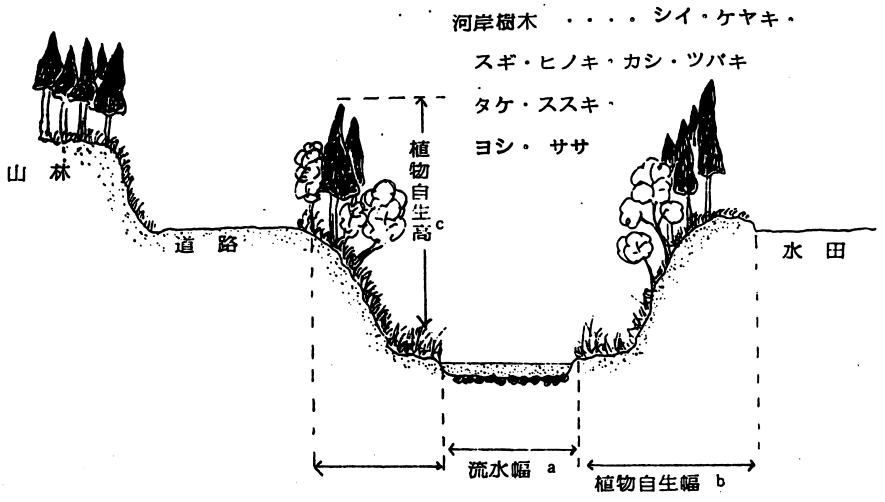
これは、カワセミ、カワガラスにとってどのような河岸環境が必要であるかを調査したもので、護岸工事、道路拡張等で河岸樹木が姿を消しはじめたので、これらの樹木を保護するため県市にお願いする資料にもしている。調査は、流水幅、植物自生幅、植物自生高の三ケ所を測定し、生息数との関係を示したのが図である。図中の○印の所には、カワセミ、カワガラスが多く生息し、また営巣も確認できた。この調査でわかった事は、$\frac{b}{a}$・$\frac{c}{a}$が、1.5～2.0は必要であること、こうした工事で本数が減少しても、高さが高ければ環境はあまり変化しないこともわかりました。

2. 山林環境の分析

学区の総面積はおよそ22.5平方キロメートルでその80%が山地、山林である。昭和30年ごろまでは市内で消費するマキ、木炭を生産していたが、現在は学区の家庭の90%がガス・石油を使用している現状である。そのため広葉林が放置され、40年代から急速にスギ・ヒノキの植林が増加し、54年度では年間20haがこうした林になり、広葉樹林の減少が目につくようになりそれと同時に、シジュウカラ、エナガ、ウソ、ルリビタキ、サンコウチョウ、キビタキなどの生息数、および分布に変化が見られるようになった。反対に増加したものは、カケス、キジ、ヤマドリなどである。

野鳥保護のために、植林をする場合次のような点で協力をお願いしている。広葉樹を帯状に10～20m幅残し、その間に植林する。また尾根の広葉樹は全部残してほしいなどです。最初は賛成してくれなかったが皆伐による土砂の流れがひどい事に気がつき現在はこの方法を利用している人が増加した。

河川環境分析図



「体験教育を通して」

滋賀県近江八幡市立島小学校
北川恒雄

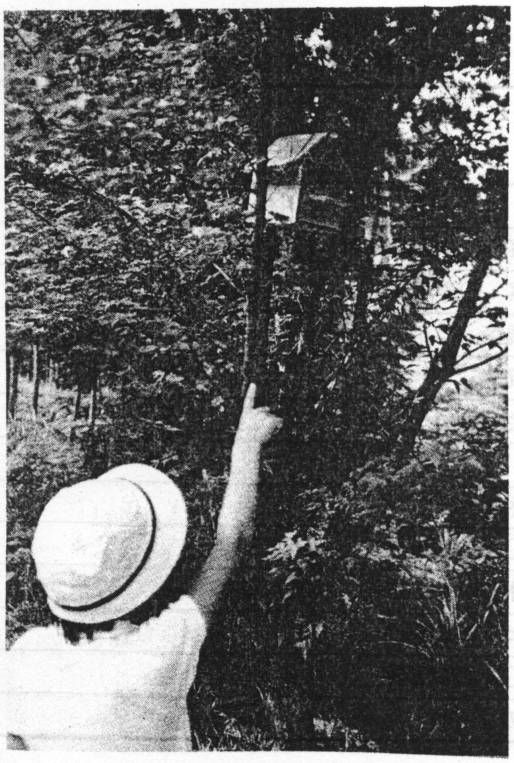
1. 環境教育の考え方

滋賀県といえば琵琶湖、昨年は、琵琶湖を汚染から守れ、これ以上汚すな…ということで、県条例が施行され、洗剤の規制は目新らしいことでした。島小学校はその湖辺にあるといっていいでしょう。

国鉄近江八幡駅から、町の中心街を離れて約10分もすれば青々とした山々、満々と水をたたえた安土・近江八幡の水郷葭（水中に生えていて、夏のすだれの材料となるもの）が青々と生い茂っていて、その間に田舟や釣り人を見ることができる地帯です。

環境教育となると、現今の潮流として、公害問題や資源問題が前面に出されるが、子どもにとっては、先ず自然愛護の精神を心に宿らせ芽生えさせなければならないと考えてます。

幸い自然環境の立地条件に恵まれた子ども達……自然にふれているようでふれていない子ども達を、真の自然にふれさせ、学習活動をいかす環境教育に取り組みたい。……というわけで学校は、「学習活動を生かすための環境づくりはどうあるべきか」と研究主題を設定し、年間計画や各学年の教科ごとの学習内容をたて、環境づくりは体験を通して学習させることにしました。



2. 活動内容

▶低学年…自然と子どもとのふれあいを大切にする。

学級園栽培、一人一鉢栽培

（ひまわり、あさがお、サルビア、金魚、どじょう）

▶中学年…地域の自然と子どもとのふれあいを大切にする。勤労体験として、ひたいに汗して環境づくり、一人一鉢栽培、学級園栽培

（うさぎ、へちま、さし木、マリーゴールド いちご）

▶高学年…地域の自然や環境に関心や興味をもち、さらに敏感に対応、観察や飼育愛護、保全のできる子どもを育てる。

学級園やスクール農園の栽培、一人一鉢（きくづくり）にわとり、小鳥の飼育、すばこづくり、同展示、同山へすばこかけ、愛鳥週間ポスターづくり、同全国展応募（昭和55年7月）アンケート調査。

3. 成　　果

A　環境美化の気運が高まる。

B　自分で飼育栽培しようとする意欲ができ、さらに家庭での親子共同作業にまで発展する。

C　動物（にわとり、うさぎの飼育）に対して、共に遊び、話しかけ、放課後は、楽しいひとときを過している。

D　よい環境をつくろうとする態度は、だれしも、もっている。美しい物、自分達で種をまき、水をやり、世話をして育てたいものは、自然と愛情がわくものである。たとえ場所はせまく、花は小さくても価値感を植えつけたい。

「学区の野鳥と自然」

滋賀県マキノ町立マキノ南小学校

1. マキノ南小学校の概要

本校は、滋賀県の北西部に位置する静かな農林漁村である。西部一帯は広葉樹林に覆われ、それが人家に接する所から、遥か西方の赤坂山に到るまで延々と続く。北側は日本最高とも言われる天井川の特徴をもつ百瀬川が流れ、又前面には百瀬川を狭んで広々とした田園風景が続いて、その先に満々と水を湛えた琵琶潮北湖を眺望することが出来る。

そして、このような百瀬川流域を中心とする雄大な自然の中で、子ども達が思うさま山野をかけめぐり、動植物の生態にふれ、これに親しみ、自然界に学ぶ尊さを数多く体験させようとするのが、本校の意図する環境教育自然環境部の本旨と言える。

2. 愛鳥教育活動について

本校は四年前より上記のように地域の特性を積極的に学習の場に活かしながら、それに、より深い理解と親近感を得させる環境教育に取り組んで来ているが、わけても愛鳥教育活動は、こども達に自主的な活動のできる場を与え、生き物に対するやさしい、豊かな心情を育てる上に極めて有効な活動と見なしている。

本校の愛鳥教育活動は十余年前より毎年5月のバードウィークを中心に巣箱作りコンクールを催し、約450個の新しい巣箱を裏の林にかけて、野鳥の繁殖に努めて来た。

昭和52年度より環境教育に取り組むに及び、野鳥については更にくわしく実態を調べ、まず知ることから始めて、しだいに愛護活動へと歩を進めてきている。活動の中では野鳥の観察、探鳥会、巣箱作り等のように積年の成果が見られるもの、給餌台や給餌木の研究活動は本年度の努力点として日々新しい試みをしている。また湖岸に訪れる水鳥の観察も昨年度より開始した。

3. 野鳥の観察・探鳥会と学習会

本校では「ゆとりの時間」などを利用して週1.2回野鳥班（4.5.6年）により、森林にすむ野鳥を観察している。裏の林約千メートルのコースを設定している。

また、ひとりひとりの観察能力を高めるために、野鳥の姿を見たり、鳴き声を聞いたら、すぐそれと解るようになるための学習会や探鳥会

この一年間の「愛鳥教育活動」

月	活動内容
4 月	○クラブ編成　○探鳥会　○営巣の観察　○水鳥の観察　○植物調べ
5 月	○野鳥学習会　○探鳥会　○営巣の観察　○愛鳥ポスター　○標語募集
6 月	○野鳥学習会　○野鳥の観察　○植物調べ
7 月	○野鳥の観察　○愛鳥活動のまとめと発表
8 月	○野鳥の観察　○探鳥会　○野鳥学習会
9 月	○野鳥の観察　○水鳥の調べ
10 月	○野鳥の観察　○水鳥の観察　○食餌木調べ
11 月	○野鳥の絵を画く会　○給餌台設置　○木の実調べ　○水鳥の観察
12 月	○野鳥学習会　○家庭給じ台設置　○木の実まとめ　○水鳥の観察
1 月	○給餌台えさづくりと観察　○水鳥のビデオ撮影
2 月	○巣箱づくり　○水鳥ビデオ鑑賞会　○水鳥の観察
3 月	○巣箱の取り付けと観察　○愛鳥活動のまとめ

を定期的に実施している。

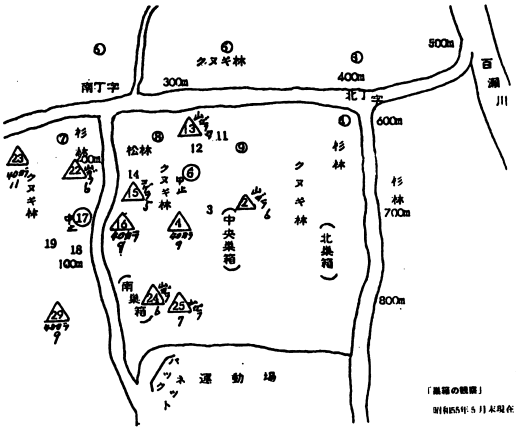
4. 巣箱づくりと取りつけ

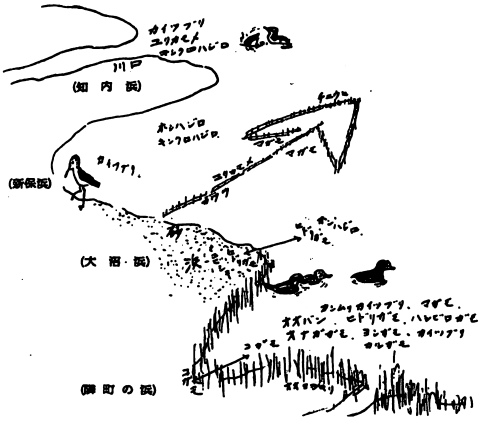
以前は巣箱の取りつけをバードウィークの5月に実施していたが、営巣はもっと早くからなされる事を考慮し、2月に作って3月初めには取り付けるようにした。毎年450個の巣箱を林の全面に配置して来たが、昨年からは観察の可能な巣箱に改良して、何が、何時、どこで巣を作っているか観察して来た。観察の結果昭和54年度ヤマガラ14羽、シジュウカラ18羽の計32羽が巣立っていた。昭和55年度はヤマガラ32羽シジュウカラ38羽の計70羽の若鳥とコゲラの卵5個を観察することが出来た。そしてこれらの営巣の場所・条件は大体きまった所になされている事が解った。

例えば、シイタケ林には虫が多いので、その付近に集中している事。巣箱の穴は北東から南東までの方向のもの。巣箱の前方は見通しのきく開けた所を選ぶ、など。

5. 餌樹木や給餌台

野鳥の餌になる昆虫が少なくなる秋から冬にかけては、当然林の中の木の実草の実をあさることが多くなるだろう。そこで、野鳥班では観察地区内に実をつけている草木の分布を調べこれを科目別にまとめてみた。そして、これらの木の実を採集してきて、給餌台に入れて、野鳥がどんな実を好むか調べたりもした。給餌台については、従来は固定式であった為、雪深い本校では雪にうもれ近よるのに不便な点を考慮し本年からは移動式のものを校舎から手の届く範囲の所に設置、熟し柿や、給食の残り物をやっている。この頃では給餌台の近くはにぎやかで





ヒヨドリ、ツグミ、シロハラ、シジュウカラ、スズメ、桜の木にはウソなど多くの野鳥がやってくる。

6. 水鳥の観察

水鳥を観察している岸辺は知内浜、新保浜、大沼浜などである。知内浜は知内川周辺で、この川口にはカイツブリ、ユリカモメ、キンクロハジロをよく見かける。新保浜にはエリが湖の深みへ傘形につき出ており、そこに集まる魚をねらってマガモ、ユリカモメ、カワウ、チュウヒなどが観察できる。また大沼のヨシ原にはホシハジロ、ヒドリガモなど、そこより少し南には、ヨシ原が続き、ここにはこれまでカイツブリ、マガモ、ヨシガモ、オナガガモ、コガモ、オオバン、ヒドリガモ、カルガモ、ハシビロガモ、カンムリカイツブリなどを観察してきた。三ケ所の浜にはそれぞれ特色があり、場所ごとに大体同種類の水鳥を見出すことができた。また、水鳥は他の野鳥に比し、大きくて、動きが少なく、特徴がはっきりして観察しやすい。水鳥は人の動きに敏感で、より近づこうとすると、沖へ沖へと離れていく。人が与える餌を求めて近よってくるまでには、かなりの努力や年数がかかりそうである。

「愛鳥活動の第一歩」

大分県杵築市立豊洋小学校
郷司信義

本校は、大分県の北東部国東半島の南東に位置し、漁業と農業が中心の地域である。学校規模は6学級148名の小規模校である。学校をとりまく環境は、白砂青松の景勝地で、四季を通じて野鳥の声が聞かれ、姿が容易に見られる。

しかし、野鳥に関心のある子どもは意外に少なく、いたずらもしないがかわいがること、観察する楽しみも知らない。校内の愛鳥活動といえば、5月の愛鳥週間にポスターをかかせるぐらいであった。

そこで、本年度は全校的に野鳥に興味関心を起こさせ、愛鳥思想を育てるために「ゆとりの時間」を利用してその実践を試みた。

1. 愛鳥週間の取り組み

(1) 学級活動

愛鳥ポスターの製作と教師による愛鳥の話、庭に野鳥をこさせる工夫、環境と野鳥の関係など学年に応じたテーマで話し合いがなされた。

(2) 全校野鳥発表集会

体育館の壁に全校児童の愛鳥ポスターを展示し、その中で、校長の愛鳥週間の意義についての話をかわきりに、次の様な発表がなされた。

① 愛鳥ポスター：低学年の各学級代表3名が、自分のかいたポスターを見せながら、絵の説明とかくときの苦労等を発表した。

② 県内で見られる野鳥で自分の好きな野鳥：高学年の各学級代表5名が、自分がかいた野鳥の絵を見せながら、簡単な特徴と種名と自分が選んだわけの発表をした。

③ 学校のまわりで見られる野鳥のスライドを使って、見られる時期と特徴と種名を解説した。

(3) 巣箱作り

高学年を10班の縦割り班に分け、各班10個の巣箱を作った。これは、全校巣箱かけ会のためのものである。4時間程かかり、材料費14,000円也。勿論、製作活動にはいる前に、どの様な巣箱を作るか話し合いをした。またそのための資料も配布した。

(4) 全校巣箱かけ会

全校を縦割り班10班に分け、各班10個（上記の巣箱）の巣箱を思い思いの場所にかけさせた。かける場所、位置、向き、高さといろいろな条件を考え、学校のまわりにかけた。

2. 巣箱の観察と探鳥会

野鳥観察のマナーと観察が予想される野鳥の種名とその特徴を全校児童に話し、班ごとに、自分達のかけた巣箱を観察するとともに探鳥を行った。巣箱の利用状況はスズメ、シジュウカラ、エナガ以外では認められず、少々がっくりしたようだったが、カワラヒワ、シジュウカラ、コゲラ、ヒヨドリ、エナガ、スズメ、トビ、ハシボソガラス等の予想された野鳥の観察ができ、見つかった、見つかったと喜んでいた。

その後、学級ごとに数回探鳥会を行ったようである。

内容的にも方法的にも未熟な取り組みであったが、子ども達にいくらか野鳥に対する興味関心がわいてきていることが、次の様なことで感じられる。

6月の初め、海岸の松林でアオバズクを見つけてきたり、夏休み中カイツブリのふ化の観察をしたり（報告文にしてないのが残念だが）秋になるとスズメの大群に驚いたり、モズが自動車にぶつかり脳しんとうを起こしているのを拾ってきたり、ジョウビタキを観察するといって低学年が帽子で捕える事件を起こしたり、野鳥に関するニュースが次々とできた年であった。

私は本校に勤務して3年目になるが、前2年間で、いよいよこの子らの目を愛鳥に向けるのはこれからであると思っている。

地域の特性を生かした豊かな人間性の育成

世田谷区立二子玉川小学校
江袋　島吉

主題設定の理由

○本校が、地域の自然環境を生かして、愛鳥活動をはじめてから、6年の歳月が流れた。この間の成果を、教育課程と関連づけて、教育目標第3項〝思いやりがあり助け合う子〟の具現化を図り、生物愛・自然愛・郷土愛・人間愛などの心情を深めたいと考えた。

○豊かな人間性の育成・ゆとりと充実・学校裁量の時間・開かれた学校・地域の教育力等、学校教育における今日的課題に迫り、日々の教育活動の充実を求めようとした。

地域の特性

本校のある玉川町は、世田谷区の西南端に位置し、多摩川を境として川崎市に接している。付近一帯は、風致区や鳥獣保護区に指定されているが、近年、地下鉄や国道バイパスの開通、ビル・マンション・商店・住宅の建設など、都市化が急速に進んでいる。しかし、北側の武蔵野台地や多摩川周辺には、わずかながらも緑が残され、川原の草むらや近くの樹木、多摩川に渡って来る野鳥の姿が見られ、本校の愛鳥活動にとって、かっこうな舞台となっている。

愛鳥活動の推移

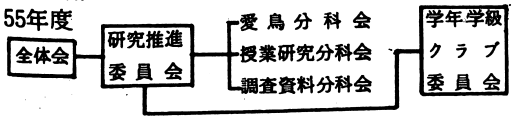
ここ10年来、区政は〝太陽と緑の町〟また〝ヒューマン都市〟の実現を目ざしてきた。その一環である巣箱運動に賛同した本校では、50年に〝野鳥観察クラブ〟を発足させた。

52年3月14日、その実績により、〝東京都愛鳥モデル校〟の指定を受け、それを機にクラブ名を〝野鳥クラブ〟と改め、従来の観察や調査の活動に、保護的活動を加えた。

54年度当初から〝愛鳥委員会〟を設け〝野鳥クラブ〟と相まって、研究・保護両面での活動の充実を期した。さらに、55年度には、学校裁量の時間として〝二子タイム〟を設定、全校的な活動の増進をはかりながら今日に至っている。

組　織

55年度



愛鳥分科会

①愛鳥モデル校としての、活動計画と実施全般。
②「野鳥だより」「愛鳥ニュース」の発行計画と発行。
③文集「ことり」の発行計画。
④8ミリ映画、スライドの鑑賞計画。
⑤野鳥観察指導の計画や、資料の提供。
⑥児童活動の指導。（野鳥クラブ、愛鳥委員会等）

研究活動年間計画

(1)　54年度

50年度、野鳥観察クラブの活動として出発した愛鳥活動も、現在では全校児童の関心の高まりや、父母・地域の協力により、定着の度を加えてきた。

研究の初年度にあたって、この全校的な高まりを、どのように教育課程と関連づけていくかについて、慎重な検討を行なった。

この種の研究は、実践事例や参考文献もほとんど無く、戸惑うことのみが多かったが、暗中模索の結果、明年度への発展ということを考えて、大略つぎのような基本方針を定めて、研究の推進を図ることとした。

①　研究内容

(ア)　教育目標の具現化を図るため、教育課程との関連を考える。
(イ)　地域の特性を正しく把握し、家庭及び地域社会との連携強化の方策を考える。
(ウ)　児童の実績を把握し、活動の具体化を図る。
(エ)　教科、道徳、特別活動の指導内容との関連を考え、授業への取り組み方について検討する。
(オ)　教師自身、鳥の名前やその生態を知り、指導の向上に資する。

②　児童の活動内容

(ア)　観察（探鳥会、営巣中のたまごやひなの観察）
(イ)　記録（記録の取り方や処理のしかた）
(ウ)　文集（「ことり」の内容）
(エ)　鑑賞（8ミリフィルム、スライド）
(オ)　巣箱、えさ台（製作と設置）
(カ)　絵、ポスター等

③　配慮事項

(ア)　教育目標の具現化を図る、一方途としての活動であることを、常に念頭に置く。

(イ) 教科等の指導時間数に不足が生じないよう、「ゆとりの時間」の活用と、その内容を十分に検討する。

(ウ) 児童や父母・地域の実態を常に把握し、その上にたって、活動計画をたてる。

(2) 55年度

54年度1年間の運営状況の反省に基づき、次のような基本方針を掲げて研究を推進することとした。

① 組織の改善

54年度は、研究推進委員会が、各種委員会組織の1つであったが、これを切り離して、独立した全校的組織とし、円滑な研究の運営ができるようにした。

② 研究内容

本年度も、愛鳥活動を、その主たる研究及び活動の中心とするが、それのみでは狭い立場での研究だけしか望めない。従って、研究対象の窓口を広め、高い視野から主題に迫らんとした。そのため、昨年度の内容に加えて、特に次の事項の充実をはかる。

ア 〝ゆとりの時間〟を二子タイムと呼称し、年間活動に要する時間数を定める。

◇〝二子タイム〟の時間数と、主な活動内容

学年	愛鳥活動	勤労活動	行事	クラブ	委員会	事前指導	合計
1	12	3	5			2	22
2	12	3	5			2	22
3	12	3	5	1		2	23
4	18	3	5	3	1	2	32
5	18	3	5	3	8	3	40
6	18	3	5	3	8	3	40

イ 授業への取り組みを図る。（主として、国語、理科、道徳、特活、二子タイム）

ウ 全校の集会活動に取り入れる。

エ 父母や地域に対して、愛鳥活動の実施や協力を要請する。

オ 全校一鉢栽培を実践し、生命尊重・自主・責任・勤労の精神を育てる方策を検討する。

③ 児童の活動内容

昨年度の活動内容に、次のようなことがらを加え、自主的活動を充実させる。

ア 全校一鉢栽培。（1年アサガオ。2～3年サルビア。4～6年キク）

イ 愛鳥活動を、児童会の活動の一つとしてとりいれる。

ウ 「観察カード」を活用し、児童ひとりひとりの自主活動を促す。

愛鳥活動について

愛鳥分科会は、学校全体の愛鳥活動について検討を加え、具体的な指導法や指導内容に関する研究を続けてきた。

(1) 活動母体と主な内容

① 学級・学年の活動

◇愛鳥活動の年間計画

学期	月	活動内容		教科領域での関連指導例
1学期	4	愛鳥週間ポスターづくり	(2)	絵をかく（図工）
	4	シジュウカラ、ムクドリの観察	(1)	作文・詩をかく（国語）
	5	映画会（スライド）	(1)	文集づくり（特活）
	5	シジュウカラ、ムクドリの観察	(1)	川原の清掃（行事）
	6	ツバメの観察	(1)	
	6	文集づくり	(2)	
2学期	9	映画会（スライド）		道徳（映画をみて）
	10	エサ台づくり	(1)	巣箱づくり（図工）
	11	探鳥会（多摩川）	(2)	作文・詩をかく（国語）
	12	巣箱づくり（修理、清掃）	(3)	川原の清掃（行事）
3学期	2	探鳥会（多摩川）	(2)	文集づくり（特活）
	2	文集づくり	(2)	作文・詩・創作（国語）
	3	巣箱かけ（指導のみ）	(1)	

② 野鳥クラブの活動 巣箱の観察や巣箱の研究探鳥会。冬鳥の餌付けの研究。・放送委員会、愛鳥委員会に対する協力。

③ 愛鳥委員会の活動 校内の広報活動。（巣箱のようす、ツバメのようす、えさ台の試作）野鳥園の管理とえさの補給。

④ 放送委員会の活動 愛鳥活動に関する放送。

⑤ その他の活動 地区子ども会の活動。（川原の清掃・探鳥会）

(2) 活動内容の具体的説明

① 探鳥会

野鳥の生活を観察してその生態を知り、鳥への愛情を高めていくことを目的とし、その鳥への愛情、鳥のすみやすい環境、つまり、美しい二子の町作りへと発展していくことを願っている。

ア 巣箱の観察

校内・玉川神社・神学校など、数ケ所にかけた巣箱への巣作りのようすを観察する。営巣する鳥はシジュウカラ・ムクドリの二種。

イ ツバメの観察

ツバメは、毎年5月～6月にかけて、正門側の

◇愛鳥活動の学年別目標

学年	野　　鳥	巣　　箱	ツ　バ　メ	給　　餌	実のなる木	冬　　鳥
1年	野鳥に関心を持つ。	巣箱にくる鳥、シジュウカラ、ムクドリを知る。 巣箱の観察〜たまご、ひな	ツバメの巣に関心を持つ。	えさに集まる鳥に関心を持つ。	野鳥は木の実を食べることを知る。	冬鳥に関心を持つ。
2年	野鳥に関心を持つ。	巣箱にくる、シジュウカラ、ムクドリの識別ができる。 巣箱の観察〜たまご、ひな	ツバメのひなの育ち方に関心を持つ。	えさに集まる鳥に関心を持ちキジバト、ムクドリ、スズメの識別ができる。	野鳥は木の実を食べることを知る。	冬鳥に関心を持ち、ユリカモメ、カモの識別ができる。
3年	野鳥に興味を持ち、キジバト、ムクドリ、スズメ、シジュウカラの識別ができる。 動きや鳴き声に関心を持つ。	巣箱にくる鳥、シジュウカラ、ムクドリの識別ができる。 巣箱の観察〜たまご、ひな、巣立ちを調べる。	ツバメのひなの育ち方に関心を持ち、自分から調べることができる。	えさに集まる鳥に関心を持ちキジバト、ムクドリ、スズメの識別ができる。 えさをまいて鳥のせわをする。	野鳥が木の実を食べるのを見る。	冬鳥に関心を持ち、ユリカモメ、カモ、サギ、セキレイの識別ができる。
4年	野鳥に興味を持ち、カラスキジバト、ムクドリ、ヒヨドリ、スズメ、シジュウカラ、ヒバリの識別ができる。 動きや鳴き声で識別できる。	巣箱にくる鳥、シジュウカラ、ムクドリの識別ができる。 巣箱の観察〜巣作り、たまご、巣立ちを調べ記録をとる。 自分で巣箱を作る。 ヒヨドリの巣を知る。	ツバメのひなの育ち方に興味を持ち、課題を見つけることができる。 南の国から渡ってきたことを知る。	給餌台に集まってくる鳥に興味を持ちキジバト、ムクドリ、スズメ、シジュウカラの識別ができる。 給餌台を作って、えさをやることができる。	実のなる木に関心を持つ。(どんな鳥が何を食べるか。) イイギリ、ヒサカキ、ピラカンサ、ムラサキシキブ、ネズミモチ	冬鳥に興味を持ち、ユリカモメ、オナガガモ、コサギ、ハクセキレイの識別ができる。 冬鳥の渡りに関心を持つ。
5年	野鳥に興味を持ち、カラスキジバト、オナガ、ムクドリ、ヒヨドリ、スズメ、シジュウカラ、ヒバリ、カワラヒワ、メジロ等の識別ができる。 動きや鳴き声で識別できる。	巣箱にくる鳥の識別ができる。 巣箱の観察〜巣作り、たまご、ひな、巣立ちを調べ正確な観察記録をつけることができる。 ヒヨドリ、キジバト、カワヒラワ等の自然を知る。 巣箱を作り管理ができる。	ツバメの巣作りやひなの育ち方等について自分から課題をきめ記録をとれる。 ツバメについての豊かな知識を身につける。	給餌台を作り、毎日えさを与え、野鳥の愛護に務める。 キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、シジュウカラ、オナガ、メジロ等の鳴き声でも識別できる。	実のなる木を調べ、自然保護に関心を持つ。 どんな鳥が何を食べるか調べる。 野鳥園の実のなる木の識別ができる。	冬鳥に興味を持ち、ユリカモメ、オナガガモ、コガモ、ハシビロガモ、コサギ、セキレイ等の識別ができる。 冬鳥の渡りについて調べる。 自分から進んで観察することができる。
6年	同　上	同　上	同　上	同　上	同　上 進んで自然愛護に務める。	同　上 冬鳥についての知識を豊かにする。 水鳥の愛護活動をする。

ウ　多摩川での冬鳥の観察

10月になると、多摩川に冬鳥がやってくる。場所は多摩川にかかるバイパスの川上。

冬鳥の観察は、寒くてつらい面も多いが、巣箱の鳥や商店街のなかのツバメと違い、自然の中の鳥のようすを観察できるのが大きな魅力である。

②　巣箱作り〜観察

毎年、4年生は全員が巣箱を作り、3年以下の各学級にも、教師や、クラブ・委員会の児童が作ったものを5〜6個ずつ配布する。

③　野鳥園

4年ほど前から、校舎の裏にえさ台を設置し、野鳥クラブでえさをやっていたが、愛鳥活動の高まりから、そこに水場を作り、実のなる木を植え、野鳥を誘致しようということになった。野鳥園は、コンクリートを流して池を作り、まわりの木を整理して、実のなる木をたくさん植えた。

従来、野鳥クラブが行ってきた保護活動の部分を、今年から引き継いだ愛鳥委員会の児童が、山が、放課後にはすっかりなくなってしまうほど、野鳥たちの食欲は旺盛である。夏休みの期間中は、近所の食料品店の協力により、パンを絶やさずにすんだ。

キジバト、ムクドリ、スズメの姿がよく見られる。野鳥園の様子は、廊下のガラス窓からよく見られるが、警戒心の強い鳥は人の姿を見て逃げてしまうこともあるので窓に色画用紙をはりつけ、小窓から観察できるようにした。1、2年の子供が背伸びして見ている姿もよく見られる。

④　文集づくり

文集〝ことり〟は、愛鳥活動が発足してから4年目の昭和53年6月に、その第1号が発刊された。

活動の記録として、児童の作文・詩・観察日記などを各クラスごと、わら半紙1枚づつに印刷をしてもらい、それを小冊子にまとめて刊行したもので、以後2年間、毎年2回づつ出されている。

⑤　愛鳥だより

愛鳥活動における広報活動の一環として、年に

4～5回、季節に応じた内容の愛鳥だよりを発行している。愛鳥だよりは、鳥の絵を中心にのせ、児童に色をぬらせて鳥の形や色を知らせ、簡単な説明で特徴をとらえさせている。

また、巣箱やえさ台を作ったり、実のなる木を植える時などの、愛鳥活動の資料や手引きとして活用している。

⑥　集　会

毎週木曜日と金曜日を児童集会としている。

この愛鳥集会は、各月を愛鳥委員会・野鳥クラブ・各学年と分担して実施している。内容はその時々の野鳥に関することを、紙芝居・人形劇・作文など自由な形で発表している。

⑦　ポスター

愛鳥ポスターは、バードウィークの前に、全校児童が作成して、その期間中は、全作品を教室・廊下・掲示板などに掲示している。その他の期間は、作品や鳥類保護連盟からのポスターなどを、廊下や掲示板に常時掲げている。

⑧　映画鑑賞会

映画・スライド会は年2回、春と秋に父母も含めて実施している。内容は野鳥関係のもので、学年に応じたものを選んでいる。

⑨　野鳥情報図版〝学校の近くで見られる野鳥〟

近くで見られる野鳥を、大地図に表示して、その時々の野鳥の様子を知らせている。野鳥クラブが行なう探鳥会や、子どもたちから寄せられる日常の情報をもとに、愛鳥委員会の児童が、木製の鳥の絵を、見かけた場所にかける。

発表大会に参加して

愛鳥教育研究会常任理事
下田澄子

12月1日、本年度の発表大会が例年通り環境庁で開催された。文字通り、北は北海道から、南は沖縄県まで、書類審査にパスした、小学校6校、中学校3校、高等学校1校計11校が、終日、何年にもわたる、所属した多くの人たちの鳥獣保護の実績を発表したのである。

1.　発表要項

この大会では、次の事項に関する実績が発表され評価された。

(1)　鳥獣保護思想の普及。（鳥獣保護の必要性密猟防止の啓蒙、鳥獣類の有益性の啓蒙宣伝等。）

(2)　鳥獣保護のための環境の保全管理とその効果。

(3)　鳥獣保護施設の設置とその効果

(4)　鳥獣保護のための生態観察または研究

(5)　傷病鳥獣の保護

(6)　その他鳥獣保護のために行った活動とその効果

2.　この活動から学んだもの

それぞれの学校が、その地域性に立脚して、工夫や努力をつみ重ねてきたことを強調していたが、いずれも豊かに郷土愛がにじみ出ていてほほえましくまた力強いものを感じさせてくれた。

大部分の発表者が「こんな川が、山が、林が野原が、湿原が」と誇りをもって語りかけていたことが、特に印象的であった。

またこの活動は、自然の中で、生物が、気象条件や仲間や他の動物と、戦ったり、こらえたり、順応したりして、生きぬいていくきびしい姿に、いやでも接触することになるので、人間を含めて生物は、そんなに自分の都合がよいようにばかり生きてはいけないのだという事実やそれ故に協同して生きる大切さや、少しも油断なく努力をつみ重ねる意味などを、いろいろな場から学んでいけるのである。

これは、学校がこの活動をとりあげる一つの大切なポイントであろうと考えるが、発表者が一様に、そこにいる生物を心からいとおしみ、大切に育てようとしている気持で接し、諸活動を推進しているので心あたたまる思いであった。

3.　巣箱かけ、給餌活動について

巣箱、給餌台、給餌植物については、発表校の大部分がとりあげ、その工夫について述べていた。

環境庁長官賞に輝いた豊岡中学校が「巣箱作りや、巣箱架けで、愛鳥の心を育てることを卒業して、自然のバランスをこわさないように、みんなで考え話し合っていこうと思います。」と

いう発表を行ったが、このことは、この学校の実践内容から見て、立派な見識であり、またこの活動を指導する立場の人が、十分に理解を深めた内容と考える。

しかし一方、巣箱をかける時間についても、行事に合わされている形で考えられ、野鳥にとって必要な時点という考え方が出てきていないケースがあり、また地域によっては人口増から自然を追われ、生きぬくことが困難になっている野鳥がいたり、さらにそこに住む人や子どもたちが、自然保護について無関心であったり、あやまった考え方を持っていたりする場合は、やはり巣箱つくり、巣箱かけ、給餌活動など必要であろうと考える。

とにかく自分の作った巣箱に営巣した野鳥に対する愛着は、特に子どもの場合格別で、そこから愛鳥の心が強く育っていくようである。営巣、産卵、育すう、巣立ちの楽しみは、やはり実践してみなければわからない感動であり、子どもたちの情操の陶冶に、大きく役立つ内容をもっている。

なお講評の中に、「巣箱を使用しない野鳥について、もっと関心を高めること、その保護対策について工夫を。」というお話しがあったが今後の活動について大きな指針であると思う。

4. 愛鳥林、野鳥の観察について

愛鳥林について、4校の発表があったが、現在ある環境を、野鳥にとってすみよいものにしていく努力や、そのことを通して、多くの人たちが啓蒙されていくという筋道は、今後、自然に対応する正しい姿勢を、人々の中に育てていく意味で、特に大切に考え、推進していきたい事柄である。

探鳥会、営巣する野鳥の観察、渡り鳥についての調査などは、理科の観察とも関連して、子どもたちに、科学的な見方、考え方を育てるために、事実と推理を区別するようにしむけたり、記録を大切にする方向で力を入れたいと感じた。

5. 発表の方法と指導について

発表態度は、どの発表者も立派であったと思う。今の子どもたちは、以前と比べて、各段の発表技術を持ち、端正な言葉で表現できる。

しかし学校によって、視聴覚器具など十分に取り入れている所とそうでない所があり、一部気の毒に感じられたものがあった。

やはり活用して発表できるように、計画的に行う方が有利と考える。

指導者側の研究について、この会としても、もっと充実する方向で努力していきたいと考えた。

6. 参加者について

児童生徒の発表がこのように広い範囲でしかも小・中・高を含めて行われることはあまり例を見ない。そして多くの青少年やその指導者に知ってもらいたい貴重な内容なので、もっと数多くの参加を実現したいと思った。

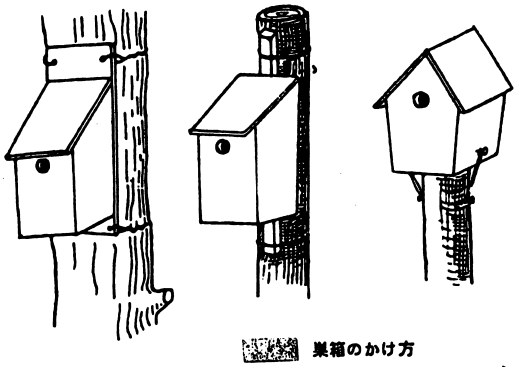
巣箱づくりの注意 (2)

柳澤　紀夫

巣箱架設の注意

架設場所についての誤りが最も多い。人が林の中や木の枝の中で、こんな所にいるのではないかと考え、よかれと思って架ける場所が、たいていはよくない場所であるところが多い。野鳥が木で止まりやすい場所と巣を作る場所とが違うことは当然であり、巣の場所は害敵からの防衛を考えて選ばれるからである。事前の十分な観察が必要なことは、こうした面でよく現われる。

- 利用させたい鳥によって、架設の環境が異なる。しかし、一般にシジュカカラ用ならば林の中に架けるのがよく、庭ならば家屋から離して架けた方がよい。スズメ用ならばなるべく家屋に近づけて。ムクドリ用は人家のまわりで、林であれば周辺部に架けるのがよい。
- 木の枝の中に架けても利用されにくい。木の幹ではなく細い枝に架けたり、枝と枝にはさんで架けたり、横枝にのせたりしたものも利用されにくい。
- 出入口の周りへ枝がかぶさってきているものはよくない。
- 巣箱をおさえているひもがゆるく、ぶらぶらしているものも利用されにくい。
- 巣箱は電柱のような、枝のない、ずぼっとした



巣箱のかけ方
（私たちの自然より）

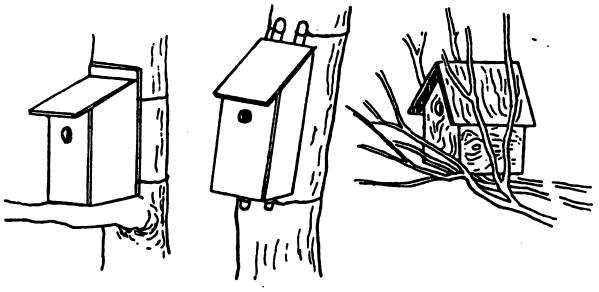
幹に架けるとよい。架ける高さは、シジュウカラ用で1～3m、スズメ用、ムクドリ用で3～5mが目安。

- 巣箱の周囲2mかそれ以上、枝が伸びてきていたり、かぶさっていたりしない場所へかける。
- 杭を立て、とりつけてもよい。
- 塀、フェンスなどでも、周囲に木の枝がないことなどを配慮すればよい。
- 巣箱の大きさ、色、形、架設の向きなどについては工夫してみるとよい。
- 架設の時の注意として、立木をいためないように十分考えること。針金で結びつけたままにしておいたりすると、幹が変形したりする。
- 架設の時期は、野鳥たちの営巣期前でなければ効果がうすくなる。関東地方ならば2月中に架設を終らせておくとよい。愛鳥週間に巣箱作りをし、架設したのでは、鳥が利用しないことになり、子供たちの熱がさめてしまう原因ともなってしまう。

利用した巣箱の観察

- できるかぎり中をのぞかないこと。

巣箱のよくないかけ方



枝の上にかける。　巣穴を上に向ける。　こんだ枝の中にかける。
（私たちの自然より）

のぞく時には、その巣の繁殖を失敗させるつもりでなければ……。

現在、日本の法律「鳥獣保護及ビ狩猟ニ関スル法律」では、野鳥の巣や卵にさわることのみのことであっても、許可が必要で、これは国の環境庁長官の権限です。これは日本産の鳥全てにあてはまり、狩猟の対象にしている鳥、例えばキジ、コジュケイ、スズメなどであっても、繁殖期間中は保護されるべきであるという方針だからです。

鳥のことをおぼえるのだから、かまわないだろうという姿勢はよいとはいえない。法律違反を助長することのないようにしたい。事前に先生の一人が許可を得ておくとよい。とにかく、鳥たちのじゃまをしないようにしよう。

- 巣をのぞかなくてもできる観察。

巣にさわることは遠慮して、少し巣から離れて観察を行なえばよい。

巣箱までの通り道はどうなっているか。
巣材や餌を運ぶのは雄か雌か、その回数はどうか。
雄、雌で役割に違いがあるかどうか。
餌の量はどうかわるか、餌の種類はどうか。
他の巣箱を利用している種類といろいろな点を比較してみよう。

など、いろいろ調べてみよう。ちょっと注意深く観察していれば、巣箱のひなの成長がどのくらいか、わかるようになる。色、形、架設の向き、などについては、それぞれ研究してみるとよい。巣材が少くてもよい巣箱なども考えてやれば、都市内の鳥は助かるであろう。

外敵から巣箱を守る

巣箱を架けた場合にも、当然自然の中と同様に外敵がいる。主なものはヘビ（アオダイショウ）、鳥（カラス類）、哺乳類（リスやネズミ類）、それに人である。

そして巣箱がその目的もあって人家に近い所に架けられることから、人の目につくことが多く、人が最大の害敵になっていることが多い。シジュウカラの巣箱は、地上1m程の高さに架ければ十分なのであるが、見つけた人はいたずら心を起してさわってしまうことになる。そのためにちょっとしたいたずら心をおこさせないよう、高さ3mくらいの所に架ければよいでしょうと指導してい

るが、とても残念なことだと思っている。

しかし、石をぶつけられたりすることも少くない。指導と教育が大切である。学校などでは、「この巣箱は今、鳥が利用している。その中をのぞいたりさわったりしないように」、と全員に知らせ大切にするよう伝えるとよい。残念ながら皆で監視することは有効である。

ヘビから守るのは、人が巣箱をさわったり、架けた木の幹をさわったりしないようにすることが大切で、においをつけないようにすることである。また、幹にまきついて登らないように、巣箱の上下、特に下にトタン板のようなすべりやすいものをまいておくことは効果がある。

ネズミやリスから守るのは、巣箱の上下につめのたたないようなすべりやすいものをまいておくこと、幹の下にネズミがえしを考えるとよい。

カラスから守るのは、本当にむずかしい。材料の板を厚くし、蝶番などはつけずにがっちりしたものにするとか、巣箱の上に止まれないよう、屋根の傾斜を大きくするなど、考えてやるとよい。

野生動物が、自然に繁殖している野鳥に影響をもつのは当然であるが、人をこの項の中に入れて考えねばならないのは、とても残念なことである。

巣箱の手入れ

シジュウカラでは、一度利用した巣箱はよほどのことがないかぎり二度と利用しない。このために一度利用されたものでは、中の巣材をすてて、掃除をしておけばよい。

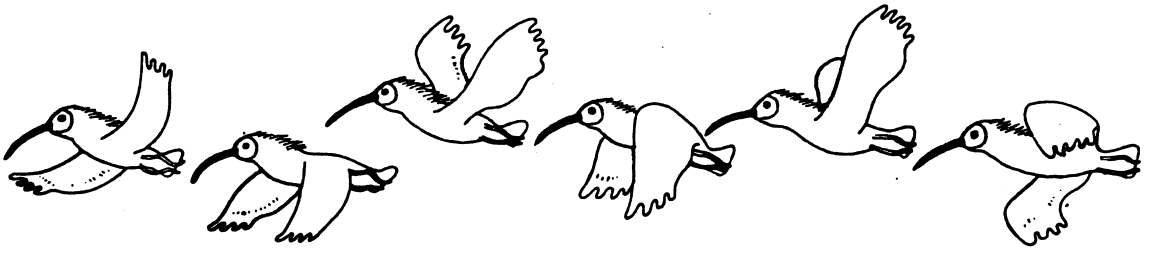
そうした手入れをするためには、巣箱を一度架けてある幹などからはずすことである。こうすれば結びつけてあるひもや針金などが幹にくいこんでしまうこともない。

手入れをするためには巣箱のどこかが開閉できるようにしておくとよい。しかし、この開閉部分が弱くなって、カラスなどの被害をうけることもある。

巣箱は鳥だけでなく、クモ類、ハチ類その他の虫類やヤモリ、時にはヤマネなどにも利用される。鳥の繁殖期前になったら、これらを追い出さないと、鳥は利用しない。もっともヤモリやヤマネなどならば使ってもらってもいいだろうと思える。

シジュウカラなどでは冬の間のネグラとしても、巣箱を使う。そのためには秋のうちに架けてやるとよい。山ではアカゲラがネグラにしていた例もある。

（日本鳥類保護連盟）



納入先　〒150 東京都渋谷区南平台町8－20
（財）日本鳥類保護連盟　内
愛鳥教育研究会

編集後記

●本号(愛鳥教育第3号)は、会員の今までの、あるいはこの一年間の活動の様子を集めて、年報のかたちにしたい、ということで企画しました。それに10余の会員から報告が届きましたので、掲載しました。

また、55年11月21日、東京都世田谷区立二子玉川小学校が、世田谷区教育委員会研究奨励校の研究として発表なさいました愛鳥活動につきまして江袋島吉先生(会員)から報告がありました。

その上、昨年12月1日に、環境庁と日本鳥類保護連盟が主催で行ないました〝第15回全国鳥獣保護実績発表大会〟(本号16ページに下田理事の参加記事がある)の、参加10校の発表記録を、環境庁のご理解をいただき、加えることができました。これから、〝愛鳥〟に関することを〝何か〟はじめようとされる会員の方々には、力強い参考資料になることと思います。

●4月から新年度になります。会員の方々は、新年度の会費を納入下さいますようお願いします。振替用紙を同封しました。この郵便振替は郵便局からの送金方法の一つですが、時間が少しかゝることを考えても、最も安全で確実な送金方法ですので、せいぜいご利用下さい。

●昨年度は本会発足1年目でしたので、会費だけで運営できるとは考えていませんでしたが、それにしてもいささか赤字が大き目です。(内容は5月の総会ならびに次号に。)とりあえず会員を増やし、会費を増やさねば、永続的な活動が出来なくなってしまう心配もあります。理事の方々、会員の皆様に仲間づくりを強くお願いします。

●次回の総会・研究会は5月下旬に東京で考えています。実践校の発表のほかに、身近に見られる鳥の標本を見てもらうことも考えています。(柳沢)

愛鳥教育　3号

昭和56年3月31日発行

愛鳥教育研究会
〒150　渋谷区南平台町8－20
日本鳥類保護連盟内
TEL.(03)461－0540
郵便振替　東京2－92041

(切りとり線)

入会申込書

愛鳥教育研究会の趣旨に賛同し、会費二千円を添えて、入会いたします。

年　月　日

申込者　個人　団体(○をつけて下さい)

氏名　㊞

住所

電話

申込者の所属、職業

勤務先の住所、名称

電話